

# ストーリー性のある喫煙描写の心理的影響

佐藤建斗

大人気ジブリ作品である「風立ちぬ」は、作中の喫煙描写の数が多いことで多くの批判を浴びた。確かに、テレビや映画での喫煙シーンをみることで、視聴者の喫煙意欲が促されるということは過去の研究でも検討されている（松崎 2013）。世界的には WHO が喫煙描写のある映画やテレビドラマに年齢制限をかけたり、日本でも日本禁煙学会がタバコの個別銘柄の CM を規制したりするなど、テレビや映画などのメディアでタバコは意図的に避けられるようになってきている。しかし一言にタバコ・喫煙描写と言っても、多種多様に渡る喫煙描写を一括りにし、まとめて規制することは正しいのだろうか。

本研究では、喫煙描写のある映画が視聴者に対して具体的にどのような要因が影響を与え、どれくらい喫煙意欲を高めるのか、ということを検討する。具体的には、ストーリー性が喫煙意欲にどの程度影響を与えるのかを特定する。ストーリー性というものは、その描写をより印象強く描写する大きな原因になり得るからだ。そしてそれらの結果から喫煙描写を全て排除しようとする風潮や施策に本当に効果があるのか、ということについて研究していく。

実験は参加者 26 名が喫煙描写の含まれる 3 つの映画の映像を視聴し、実験開始前と一つ一つの映画が終了するごとにそれぞれ調査票に回答をする形で行われた。実験の結果、映画のストーリーや登場人物の印象づけの面でのタバコや喫煙描写の印象が残りやすいほど、喫煙シーンをカッコ良い、タバコが美味しそう、また自分もタバコを吸ってみたいと思うようになるということが示された。一方、そもそもタバコが有害であるからどんなことがあってもタバコは避けるという考えや、映画は映画で割り切ってタバコや喫煙描写を楽しむという意見も見られた。つまり、視聴者が抱いていたタバコや喫煙に対するイメージや考えを根本から大きく変えるまでは至らないものの、視聴者の喫煙意欲が促されるかどうかはストーリーや登場人物の印象づけに左右されるということが示された。この結果より、本研究では喫煙描写を一括りにして規制をする施策は間違っており、「風立ちぬ」をはじめ、喫煙描写が含まれたテレビや映画などのメディアへの規制の実施や批判の風潮が間違っていたという結論を導いた。